



C2021-08 聖書の中のオリンピック

[今月の聖書]

第一コリント (9: 24-27)

9:24 あなたがたは知らないのか。競技場で走る者は、みな走りはするが、賞を得る者はひとりだけである。あなたがたも、賞を得るように走りなさい。9:25 しかし、すべて競技をする者は、何ごとにも節制をする。彼らは朽ちる冠を得るためにそうするが、わたしたちは朽ちない冠を得るためにそうするのである。9:26 そこで、わたしは目標のはっきりしないような走り方をせず、空を打つような拳闘はしない。9:27 すなわち、自分のからだを打ちたたいて服従させるのである。そうしないと、ほかの人に宣べ伝えておきながら、自分は失格者になるかも知れない。

ピリピ (3: 12-14)

3:12 わたしがすでにそれを得たとか、すでに完全な者になっているとか言うのではなく、ただ捕えようとして追い求めているのである。そうするのは、キリスト・イエスによって捕えられているからである。3:13 兄弟たちよ。わたしはすでに捕えたとは思っていない。ただこの一事を努めている。すなわち、後のものを忘れ、前のものに向かってからだを伸ばしつつ、3:14 目標を目ざして走り、キリスト・イエスにおいて上に召して下さる神の賞与を得ようと努めているのである。

ヘブル (12:1-2)

12:1 こういふわけで、わたしたちは、このような多くの証人に雲のように囲まれているのであるから、いっさいの重荷と、からみつく罪とをかなぐり捨てて、わたしたちの参加すべき競走を、耐え忍んで走りぬこうではないか。12:2 信仰の導き手であり、またその完成者であるイエスを仰ぎ見つつ、走ろうではないか。彼は、自分の前におかれている喜びのゆえに、恥をもちとわなないで十字架を忍び、神の御座の右に座するに至ったのである。

ヨハネ (16:33)

16:33 これらのことをあなたがたに話したのは、わたしにあつて平安を得るためである。あなたがたは、この世ではなやみがある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている。

第二テモテ (2:5)

2:5 また、競技をするにしても、規定に従って競技をしなければ、栄冠は得られない。

お元気でお過ごしでしょうか。今月は、「聖書の中のオリンピック」と題して人生を競技にたとえ、勝利を得る秘訣について学んでみましょう。ちょうど東京オリンピック 2020 が始まりました。コロナ問題も含め、実に多面的な戦いが進められていることに気づきます。主催者側からするならば、感染者を最小にして競技を終わらせたいと思うでしょう。そこにはウィルスとの戦いがあります。政府にとってはそれによって国際的な名声を得、あわよくば経済的利益を得たいと思うでしょう。しかし競技者一人一人にとっては、積み重ねてきた訓練の結果として金メダルを取りたいと思うでしょう。それを遠くから見る観客からするならば、競技者のパフォーマンスの素晴らしさによって感動を与えられ声援を送るでしょう。このオリンピックという出来事の中に、私たちの人生の戦いが凝縮されていると言っても過言ではありません。特に新約聖書では、ローマ時代に各地で行われていたオリンピックのような大きなイベントを見て、その競技者たちの命がけの戦いをクリスチャンたちの迫害時代に生きる励ましとしています。

1980 年に来日した 20 世紀最大の伝道者ビリーグラハム師とともに、私は 1 年以上活動しました。またビリーグラハム博士の説教に大変感銘を受けました。その中に「人生は競技」(Life is game) という説教があります。

人生はギリシャ時代の競技に似ています。その特徴は、①ゴールを目指すこと②そのために訓練しなければならないこと (discipline) ③ルールに従うべきこと④勝利者には栄冠が与えられること。この 4 点が挙げられていますが、私はテレビで競技を見ながら⑤コンディションが重要だと気づきました。どんなに優れた競技者でも、その日の調子が悪ければ良い結果を見ることができません。クリスチャンとしてはこれを霊調 (spiritual condition) と言います。コンディションを崩さないように祈りぶかく、御言葉に注意を払って、しかし全力で進んでいくのですね。

猛暑の季節を迎えています。心と体の健康が保たれて、神の栄光を表すことができますようにお祈りいたします。

小田 彰

[聖書時代の競技]

旧約聖書の時代、エジプト人やバビロニア人のように、パレスチナ人も重量上げやレスリング競技を楽しんでいたと思われます。ヤコブが夜明けまで主の使いと「格闘した」とあるのはレスリングのようなものだったと思われます。(創世記 32:24-26) それは今日までユダヤの相撲となり、日本の大相撲にまで伝えられてきているのです。

ダビデの家来ヨアブとサウル王の家来アブネルが戦いにおいて、両軍からレスリングの代表選手を出して決着をつけようとした(第二サムエル 2:14-16)が、当時そのような競技が行われていた事が推測できます。

新約聖書では、伝道者パウロがギリシャ半島の町コリントを訪れたとき、当時相当大きな競技場があったと思われますが、競技者たちの厳しいトレーニングや命がけの戦いを目の当たりにして感銘を受けたと思われます。本日のテキスト第一コリント 9:24-27,ピリピ 3:8-16,また若い弟子テモテへの手紙の中で、「また、競技をするにしても、規定に従って競技をしなければ、栄冠は得られない」(第二テモテ 2:5)と語っていることからしても、魅力的なテーマであったと思われます。



天使と相撲を取ったヤコブ



今日のオリンピックの元となった競技はギリシャ文化のひとつの遺産です。紀元前5世紀アレクサンダー大王によって拡大したギリシャは、その思想において、民主主義という政治理念において、ギリシャ語という言葉において、建築技術において、さらにオリンピックのような競技においても現代に至るまで、世界の歴史に大きな影響を及ぼしています。その後世界を支配したローマ帝国は軍事大国でしたが、その文化も言語も全てギリシャそのままであったのです。また私たちの新約聖書も当時の世界共通語であったギリシャ語で書かれたわけです。

ギリシア人は均整のとれた肉体の感性にこそ人間の理想像があると考えていました。ギリシャ文化の波及するところには必ず、大競技場や体育施設が設置されていました。新約聖書時代のエルサレムにも体育施設(ギムナシオン)が建てられていました。それ故へロデ大王はユダヤ人の反感を買っていました。

古代ギリシャ競技には四大大会がありました。ゼウス神のために開かれたオリンピア競技、ポセイドンのために開かれたイストミヤ競技、アポロ神のために開かれたピティア競技、ネメア・ゼウスを記念したネメア競技の四つです。オリンピアでは4年ごとに、イストミヤでは2年ごとに競技が行われました。競技の種目は、競走、高飛び、円盤投げ、槍投げ、レスリングの五種目で、その全種目に勝ったものが優勝者とされました。優勝者になる事は当時の人々の最高の榮譽であり市民の中から一人でも優勝者を出す事はその都市にとってこの上ない名譽でありました。そのために長期間をかけて厳しい訓練が行われました。

ただいま行われていますオリンピックは多分に美化されていますが、実際は力と欲望の象徴であったゼウス神に捧げられた祈りであったという事は知っておかなければなりません。オリンピック委員会が巨大な利益と、全世界への支配力を強め、そこに参加する人々の欲望をかき立てているという事実はこの歴史的背景が物語っているのです。世界に平和をもたらすスポーツ大会という表現も甚だ偽善的に聞こえます。その意味でスポーツ万能の時代も、人間の原罪を清めるのではないことに気付かねばなりません。

「このようにして、キリストの日に、私は自分の走ったことが無駄でなく、労したことも無駄でなかったと誇ることができる。」(ピリピ 2:16)

